

すくすく

G E N K

I

2014年6月号

京都協立病院 小児科

衣替えの季節となりました。日中は少し汗ばむ陽気となり、夏を思わせる日差しに早くも日陰が恋しくなってきましたが、皆さんいかがお過ごしでしょうか？

また、うっとうしい梅雨の季節にはいってきます。梅雨冷えの肌寒い日もありますので、体調に気をつけてあげてくださいね。



溶連菌感染症とは？

溶連菌という名はよく聞かれると思いますが、正確に知っておられる方は少ないようです。溶連菌（溶血性連鎖球菌）は咽頭（のど）の常在菌で、健康人の咽頭から5～20%の割合で検出されます。この菌が起こす病気はほとんどが急性扁桃・咽頭炎ですが、他に猩紅熱、リウマチ熱、急性腎炎などが有名です。

扁桃炎は発熱し、のどが赤くなり、ほとんどが咽頭痛（のど痛）を伴い、又嘔吐する事も少なくありません。一方、溶連菌性発疹症は四肢末梢（手背、足背）や腋の下、鼠径部、顔などにザラザラした小さな丘疹が出現し、それが集まると紅斑の様にもなり、たいいてい痒みを伴います。発熱を伴うことがほとんどですが、無熱の場合もあります。この発疹は菌が作る発赤毒素により出現するだけで、実体は扁桃炎と同じですから、これらを含めて溶連菌感染症と呼んでいます。

<診断>

咽頭（扁桃）を綿棒でこすりその中に溶連菌がいるかどうか調べます。10分くらいで分かる大変便利な方法です。

<治療>

ペニシリン系の抗生物質の内服です。現在この抗生物質の効かない溶連菌は存在しません。ほぼ一日で解熱しますが、2～3日で内服を中止するとまた発熱する事が多いため、約10日間内服を続ける事が勧められています。解熱すれば他への感染力はほとんどなくなりますし、解熱し元気になったら入浴も集団生活も一向にさしつかえありません。

★溶連菌感染症で大切な事

- ① 咽頭からの検査でしっかり診断する。
 - ② 内服は約10日間連続して行い決して中断しない。
 - ③ 再発したとしてもまた内服すればよいということです。
- ありふれた病気ですが、しっかりした診断が大切な病気といえます。



解熱薬の使い方



★発熱は体を守る為の防御反応

発熱は、病気の原因であるウイルスや細菌と有利に闘うための防御反応です。体温があがるとウイルスや細菌の活動が弱まり、感染の悪化を防ぐことができます。また、体温の上昇とともに免疫細胞が活性化され、早期に病気から回復することができるのです。

★解熱薬の使い方

解熱薬は、熱によるつらさを軽くするための薬で、病気を治す薬ではありません。熱を下げることばかりに気をとられないようにしましょう。

1. 38.5℃以上でつらそうにしていたら使う。
2. 高熱でも元気そうなら使わなくてもいいです。また、眠っている子を起こしてまで使う必要はありません。
3. 一度使ったら、次に使うのは6～8時間以上あけましょう。

座薬か飲みくすりか??

効き目は同じです。吐く子には座薬を、下痢のときや座薬が嫌いな子には飲み薬を。座薬の解熱薬と、のみ薬の解熱薬を同時に使ってはいけません。

冷やしていいですか??

子どもさんが気持ちよさそうにしていたら冷やしてください。でも冷やしても熱はさがりません。子どもが嫌がる時は、無理に冷やさなくてもいいです。

※子どもの解熱薬はアセトアミノフェンを主に使います。
大人が使用する解熱薬は使わないようにしましょう。

